
リライト ～紅く染まった花～

影夜叉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リライト ～紅く染まった花～

【Nコード】

N3031Y

【作者名】

影夜叉

【あらすじ】

全ては、あの日から始まった……！！
ある夜、銀時は過去の夢を見る。
その翌日、桂からある妖刀の話を聞いた。
その妖刀を手にはしていたのは……。

第0話 全てのはじまり

ただ、刀を振るった。

『奴』が、先生の敵だと分かって。

高杉は、左目をやられているのに、向かって行った。

だが、あっという間に斬り伏せられ、とどめをさされそうになる。

『奴』は不気味に笑いながら、高杉に剣を振り下ろした。

嫌だ、死なせたくない。

もうこれ以上、誰かが死ぬのは見たくない。

声にならない叫びを上げ、俺は『奴』に飛びかかった。

気が付くと、『奴』の姿はなかった。

何があつたのか覚えていない。

微かに覚えているのは、自我が飛んだ瞬間と、一瞬だけ聞こえた俺を呼ぶ声。

視界の端にいた刹那に目をやる。

一目で、刹那の感情が分かった。

戸惑い、驚き、不安、心配、恐怖……。
考えつく感情は幾つもあったが、恐らく、最後の感情が一番強いだ
ろう。

俺が、『あれ』になった姿は……。

第1話 警告する悪夢（前書き）

なんか、『次元を征く者』の2話に似てしまった……。

第1話 警告する悪夢

「……っ!」

銀時は起き上がる。

時刻は深夜、夜明けまで何時間もおる。

「夢か……」

全身から汗が噴き出し、息が上がっていた。

（なんで…今更……）

頭を押さえ、先程の夢のことを考える。

数年前、それも、戦争の時の夢を、何故今頃見たのか……。

「……」

寝ていたリビングのソファから降りると、窓の近くに行き、月を見上げる。

（あの時と同じ月……か）

一息つき、背を向けるとソファに戻ると、横になって目を閉じた。

「……」

気付くと、見渡す限り、真っ暗な闇の中にいた。

辺りを見回す。

何も見えないが、そこがどこなのかは分かっていた。

（久々…だな）

この場に来た回数は少ない。

だが、妙に懐かしく感じる……。

そう思っていると、背後に気配を感じた。

さっきの夢を見て、俺がここにいるということの意味が大体分かった。

「警告でも、しに来たのか……？」

ゆっくりと振り返ると、少し離れた所に、『あいつ』が立っていた。

第1話 警告する悪夢（後書き）

内輪ネタを入れていこうかな。
ギャグで。

第2話 静寂な朝（前書き）

『月の残像』に登場した、月原白哉^{つきはらびやくや}を約半年振りに出しました。

^{おいかわせつな}及川刹那も『月の残像』の設定で登場します。

第2話 静寂な朝

「おはようございまーす」

玄関からする新八の声に、銀時はぼんやりと目を覚ます。

（朝か…）

起き上がり、窓の外を見ると、朝陽が差し込んでいる。

「あ、銀さん。やっぱり、ここで寝てたんですね」

「ああ、白哉が移すといけねーから、ってな」

昨日から風邪をひいている白哉は、銀時に移したくないと言っていた。

その為、銀時はソファで寝ていた。

「俺は白哉のお粥作るから、おまえは朝飯作れ」

「は！？一緒に作ればいいじゃないですか！！」

文句を言う新八を無視して、銀時は台所に向かった。

「まったく……」

新八は、呆れながらため息をつく、押し入れに声を掛ける。

「神楽ちゃん、起きて。朝だよ！」

「うー、あと5時間……」

「どんだけ寝るつもりだ!!」

大声でツツコんでいると、和室から、寝巻き姿の白哉が出てくる。

「あ、月原さん！」

「びゃつくん、起きてて大丈夫アルか？」

「熱は下がった。元々俺は、風邪ひいてもすぐ治るんだよ」

そう言っつて、白哉はソファに座る。

「でも、バニラが作った薬もあったから、すぐに治ったネ」

「まあな……」

答えてから、何かを考え込む。

「どうしたんですか？」

「銀時が…何か言っつてなかったか？」

「何かっつて？」

「夜中に、何かブツブツ言っつてたんだよ。寝言かもしれないけどな」

「どんなこと言ってたアルか？」

「違うとか、俺はずっといる……とか言ってたな」

「なんですか？それ……」

「俺も意味が分かんねエけど……」

「白哉の奴、聞いてたか……」

気配を消し、あいつらに聞こえないように、俺は呟く。

『中』での会話は、寝言のように口にしていたらしい。

（断片的なら、伝わらねーか……）

頭を掻き、台所に戻る。

『あいつ』は、警告こそしなかったが、ずっといると言っていた。
俺の『中』で……。

第2話 静寂な朝（後書き）

『月の残像』の続編っぽいけど、続編ではありません。

第3話 辻斬りと妖刀

朝食の後は、特にすることがなく、全員だらけていた。

「暇アル…」

「依頼こないですかね…」

「銀時、いるか!？」

戸を開ける音と共に、桂の声が聞こえた。

「あ、桂さんが来ましたよ」

「ヅラかよ……」

銀時は舌打ちをする。

桂はリビングに入り、ソファに座った。

「勝手に入ってきて、勝手に座んでくれる?」

「別にいいではないか。それより、最近辻斬りが出るのを知っているか?」

「ああ…」

数日前から辻斬りが現れ、被害に遭った者は何人もいると言う。

「確か、出逢った奴らは、みんな殺られてるって聞いたけど」

話を聞いていた白哉は、呟くように言う。

「そうだ。出逢った者は皆、な……」

「辻斬りの特徴とかは無いんですか？」

新八が訊くと、桂は「特徴か……」と呟いた。

「すまんが分からん。ただ、その辻斬りが持っているらしい刀のことは聞いた」

「どんな刀ネ？」

「とどめを刺す時、刀の刀身が、赤黒く光るらしい……」

「赤黒く光るう？何だよ、それ」

特徴を聞き、白哉は肩をすくめる。

「まさか、紅桜みてーな機械^{からくり}刀なんじゃねエのか？」

「だったら、大事じゃないですか！」

紅桜を連想した銀時に、新八は不安げに言う。

「……ひがなばな」

「え？」

特徴を話した後、何かを考えていた桂は、ぽつりと言った。

「この名に、聞き覚えは無いか？」

「それって、9月頃に田んぼとかに咲いてる花のことですか？」

「いや、花の名前ではない。……刀の名だ」

「その刀が、どうしたんだ？」

「それは…、妖刀と言われている刀だ」

少し間を空けた後に言い、桂は続けた。

「ひがんばん花は、魂を喰らうと言われている。斬られれば、たちどころに死に至るらしい……」

桂は説明しながら、紙に緋願花の字を書く。

「これで『ひがんばん』って読むのか……」

「字だけを見ると、妖刀とは思えませんがね」

「他にも、『魂喰い』、『死を呼ぶ不吉』など、様々な呼び名がある」

説明を終えると、桂は立ち上がった。

「もし仮に、辻斬りが緋願花を持っていたら、とにかく逃げろ。そ

の刀には、何かある」

「珍しいな。おまえがそこまで言うの」

いつになく真面目な桂に、銀時は少し驚く。

「以前、その刀の名を、どこかで聞いたことがあってな。どこだったか思い出せんが…」

「わーったよ。とりあえず氣イ付ける」

銀時は手をヒラヒラ動かしながら答え、桂はそれを見てから出て行った。

第3話 辻斬りと妖刀（後書き）

緋願花の名前は、BLEACHのゲームに登場する斬魄刀から取りました。

また、『魂喰い』と『死を呼ぶ不吉』はガンガンに掲載されている2つの漫画の中から取りました。

第4話 紅い花

「本当に、そんな妖刀あるのか…？」

桂が帰った後、白哉は頼杖をしながら呟く。

口調から、半信半疑のようだ。

「でも、妖刀があってもなくても、辻斬りには気を付けた方がいいですね」

「そうアル。今までにも、辻斬りにはとんでもない奴が沢山いたネ」

すると、銀時は立ち上がり、玄関に向かう。

「あれ？銀さん、どこ行くんですか？」

「ちょっとパチンコ」

「は！？こんな時に、何言ってるんですか…！」

新八は叫ぶが、銀時は出て行く。

「あ的那天パー、危機感とかねーのか…？」

「俺もどっか行つてこよ」

苛立つ新八を無視して、白哉も外に行こうとする。

「びやっくんは駄目ネ！風邪がちゃんと治ってないのに、外出たら、また熱出すアルー！」

「もう治ってるって！平気だよー！」

「駄目ですよ。今日1日は、外出しないで下さい！」

「しょうがねエな……」

ため息を付くと、白哉はふてくされながら、外に行くことを諦めた。

「緋願花ね……」

銀時は歩きながら、桂から聞いた妖刀の名を口にした。

（よりによって、あの花と同じ名前とは……）

そう思いながら、同じ名の花を思い浮かべる。

彼岸花には、思い入れがあった。

幼い頃、銀時が松陽に拾われて間もない時、河原で紅い花が幾つも咲いているのを見つけた。

「真つ赤だ……」

銀時は先の丸まった紅い花を、じっと見た。

「それは彼岸花と言う花ですよ」

「ひがんばんな？」

松陽が隣に立って言い、銀時は振り返って訊く。

「縁起が悪い花とも言われていますが、とても綺麗な花でしょう？」

「うん…」

再び花を見つめ、触れてみる。

花は、僅かに揺れた。

「彼岸花は真っ赤な色が多いのですが、白い彼岸花もあるそうです」

「白いのも？」

「ええ。白い彼岸花は、きっと銀時の髪のように綺麗なんでしょうね」

ずっと昔に話したことが、鮮明に甦る。

「汚しやがって…」

表記こそ違えど、同じ『ひがんばん』と言う名前に、銀時は嫌悪感を抱いた。

「……とりあえず、あそこに行ってみるか」

呟くと、銀時はある場所に向かった。

第5話 妖刀の起源（前書き）

小説のタイトルを変えました。

第5話 妖刀の起源

銀時はある場所…鍛冶屋に來ると、中に入った。

「おい、いるかア？」

「銀さん！」

刀を打つ手を止め、鉄子は振り返った。

「久しぶり。今日はどうしたの？」

「ああ、ちょっと訊きてエことがあんだけど」

銀時は、桂の話していた緋願花のことを大まかに言った。

「緋願花か……」

「何か知らねーか？」

「ちょっと待っててくれるか？」

鉄子は部屋の奥に入って行く。

「お待たせ」

数十分程待たされ、鉄子は古そうな本を持って戻って來た。

「何か分かったか？」

「うん…。かなり昔に打たれた刀みたいで、信憑性に欠けるが……」
そう話しながら、鉄子は本のページをめくる。

「緋願花には、対となる刀があるらしい」

「対となる刀ア？それも妖刀か？」

「前にも言ったけど、妖刀の話自体は眉唾ものだ。元々の緋願花は、妖刀ではなく、神器だったと書いてある」

本には、二振りの刀の絵が描かれている。

「緋願花と対をなす刀の名は、『きんせんか琴扇花』と言っらしい……」

「きんせんか？また花の名前か…。で、その刀は、今どこにあんだ？」

「残念だが、その刀はもう存在しない。熔岩に落ちて、消失したとある」

「もう無エのか……」

銀時は頭を掻き、座り直した。

「緋願花の刀身は、紅緋色。琴扇花は朽葉色だと言う。抜群の切れ味と、美しさを兼ね揃えた神器が、何故妖刀などと呼ばれるように

なったかは分からない」

だが、と鉄子は続けた。

「神器が本当に妖刀になったとしたら、一度魂を喰われれば、元に戻ることは無いかもしれない」

「……そうか」

呟くと、銀時は立ち上がった。

「いろいろありがとな」

「…銀さん」

出掛けに鉄子が呼びかけ、銀時は振り返った。

「もし本当に、緋願花に出逢ったら、無理だけはしないでくれ…！」

「ああ…」

軽く返事をし、鍛冶屋を後にした。

第6話 夕暮れの空

万事屋を出た桂は、人通りの少ない道を歩きながら、辻斬りのことを考えた。

『桂さん』

前方から、エリザベスが来て、プラカードを見せる。

「ん？エリザベスか」

『万事屋に行ってたんですか？』

「ああ。伝えることは伝えた。後は、あいつらにも言わんとな……」

そう言った時だった。

「かゝつらアアッ！！」

爆音と共に、真選組隊士を引き連れた沖田が現れ、こちらにやって来る。

「真選組……！逃げるぞ、エリザベス……！」

『はい！』

桂はエリザベスと共に、路地裏に逃げ込む。

「やれやれ、やっと撒いたか……」

真選組から逃げ回り、桂はようやく安堵する。

「さて、あいつらの所に行くか。エリザベス、おまえは先に帰っている」

『分かりました』

去って行くエリザベスを見送り、桂は、ある橋の上に行く。

「遅かったな」

橋の上には、笠を被った高杉と、普段の服装の刹那がいた。

「ああ、真選組に追われていた」

「…で、何の用だ？」

鼻で笑った後、高杉が訊いた。

「昼間、銀時に言っただが…」

桂は2人に、緋願花のことを話した。

「緋願花か……」

「聞き覚えは無いか？」

「無エな」

「前に…本か何かで、見たことあるかも…」

「本当か？」

刹那は、やや曖昧に頷いた。

「結構前に見たから、確証は無いけど…。確か斬られた人は、ずっと眠り続けて目を覚まさない…だったかな」

「死ぬんじゃないのか？」

「いや、死ぬまで目を覚まさない、ということじゃないか？別名が、『魂喰い』や『死を呼ぶ不吉』と言う位だからな」

「そんな刀を、辻斬りが持つてるかもしれないのね…」

ぽつりと刹那が呟き、桂は空を見上げた。

「緋願花には関わらない…いや、出来れば出逢いたくないものだな」

「ヅラ、おまえが真っ先に出逢いそうだけだな」

これまでのことを思い出し、高杉はニヤリと笑った。

「貴様…っ！気にしていることを…！」

「ま、せいぜい気イ付けろよ」

「私達も気を付けるね」

高杉と刹那は、踵を返すと去って行った。

「妖刀って、本当にあるのかな…。あ、忘れてた」

刹那は立ち止まり、書簡を差し出す。

「これ、今日の夜襲撃する料亭の見取り図と配置」

「ああ…」

高杉は書簡を受け取り、軽く中に目を通すと、懐にしまつ。

「毎回悪イな。おまえの千里眼に頼っちまって」

「別にいいよ。目的は一緒なんだし」

薄く笑って言うが、何かの気配を感じ、辺りを見る。

「どうした？」

「今…、変な気配がした……」

「真選組か？」

「違う。何か、禍々しいものが……」

辺りに見えるのは、夕暮れの景色と少ない人影。

怪しいものは見当たらない。

「千里眼でも見えねエか？」

「……見えない」

目を閉じてあちこちを向くが、変わったものは見えなかった。

「あれ……？ 気配が消えた」

「消えた？」

「うん……。突然消えた」

不穏な空気になったが、2人はそこで別れた。

第6話 夕暮れの空（後書き）

刹那の千里眼…。

いずれ説明します。

これまでの小説を見ていれば、何かすぐに解ると思われそうですが……。

第7話 闇に光る刀

「帰って来ないな。銀時の奴…」

窓の外を見ながら、白哉が言った。

銀時が出て行ってから、数時間が経ち、外はすっかり暗くなっている。

「どこで寄り道してるネ…」

ソファで寝転びながら神楽は言うが、その様子は落ち着きが無い。

「近くを見てきた方がいいかな…」

「辻斬りが出るって言うてんのに、危険じゃないか？」

「なら、ちよつと行つて来るネ！」

新八と白哉の話を聞き、神楽は外に飛び出して行く。

「おい、神楽！」

「僕が行きます。月原さんは、銀さんが帰って来るかもしれないんで、残つて下さい！」

新八も木刀を手に取ると、外に飛び出した。

白哉は1人、部屋に残される。

「置いてかれた…」

ぽつりと呟く。

尤も、風邪が完治していない為、どの道白哉は留守番になっていたのだが……。

万事屋を出た新八と神楽は、夜の街を歩く。

「銀さん、どこ行っただろう…」

「どうせどっかで、金玉なり銀玉なり転がして」

そこまで言っつて、神楽は急に立ち止まる。

「どうしたの？神楽ちゃん」

「あっち……」

暗い路地を指差す。

神楽の指を見ると、震えていた。

「あっちから……血の臭いがするアル」

「血の臭い……!?!」

新八は驚き、路地を見つめた。

「…私、行ってみるネ」

「え!？」

「辻斬りかもしれないアル」

「駄目だ、危ないよ!桂さんの言ってた話が本当だったら…!!」

「でも…っ!何が起きてるか気になるネ!それに……」

神楽がその先に、何が言いたいか分かった。

「…確かに、僕も気になる。でも、銀さんじゃない!」

はつきりと言い、神楽を見た。

「行こう。辻斬りが、もし緋願花を持っていたら、その時はすぐ逃げよう!」

「分かったネ!」

2人は路地に入り、臭いを辿って行く。
やがて、街頭の殆ど無い、裏通りに出る。

「この近くからするネ…」

辺りには、濃い血の臭いが広がっている。

「うん…。でも、誰もいないよ」

血の臭いはするが、周りに人や死体は無く、血の一滴も落ちていな

い。

「こんな時間に、ガキがうろついているとはな……」

突然、辺りに低い声が響いた。

「誰だ!？」

「姿を見せるアル!」

その時、神楽は見た。

闇の中でも、銀色に光る刀が、新八に振り下ろされようとしているのを。

第8話 滲み出る殺気

「新八、逃げるアル!!」

神楽が叫ぶと、新八は、自分に向かって刀が振り下ろされていることに気付く。

「うわアアツ!!」

（駄目だ、間に合わない……!!）

そう思った時だった。

ガキインツ!!

高い金属音がし、見てみると、木刀で相手の刀を押さえる銀時がいた。

「銀さん!」

「銀ちゃん!」

「何やってんだよ、おめーらは」

相手の刀を押し返し、銀時は2人を一瞥する。

「銀ちゃんを捜しに来たネ! なかなか帰って来ないから……」

「そうかよ…」

呟き、相手を見据える。
辺りが暗い為、顔が見えない。

「ガキ相手に、しかも、武器も構えてねー奴を襲ったア、汚エヤロ
ーだな」

相手は黙っている。

銀時は舌打ちし、構わず続けた。

「……てめーが、辻斬りか？」

「……」

「おい、聞いてんのか!？」

声を荒げると、相手は不気味に笑った。

「……っ!」

笑い声を聞き、新八と神楽は、思わず後退る。

「……久しぶりだな」

声からして、相手は男のようだ。
銀時は声を聞いて、目を見開いた。

(こいつ…、まさか…!!)

声を聞き、様々な光景が頭をよぎる。

「銀ちゃん…？」

「どうしたん…ですか…！？」

銀時の様子を見て、新八と神楽は声を掛ける。
が、銀時は答えず、木刀を握り締めている。

「また遭えるとは思わなかったぞ。……白夜叉」

その瞬間、銀時は駆け出し、木刀を振り下ろす。

「銀さん！？」

殺気立った目で、激しく木刀を振るう銀時に、2人は呆然と見つめる。

「てめエの…、てめエのせいで…っ…っ！！」

「あいつ…、銀ちゃんに何かしたアルか…？」

銀時の発言に、神楽は呟いた。

「分からない。でも、あんな銀さん…見たこと無い……」

2人は、激しく戦う銀時と男を見つめることしか出来なかった。

第8話 滲み出る殺気（後書き）

この後の展開どうしよう……。

第9話 黒き夜叉（前書き）

やっと煉獄姫の刹那が書けた…！！

タイトル通り、例のあの人が出ます。

……ハリポタか。

第9話 黒き夜叉

銀時と男の戦いはしばらく続き、辺りには刀と木刀のぶつかり合う音が響く。

「銀さん…！」

「新八、あいつ…ヤバイアル……」

震える声で、神楽はぼつりと言った。

「あいつ…、強さだけじゃないネ。何か…恐ろしい感じがするアル…」

「うん…。僕もそう思う…」

相手の強さは勿論、よく見えないが、容姿や持っている刀にも、不気味な気配がしていた。

「はっ…はっ……」

呼吸を荒くし、銀時は後ろに下がる。

「おかしいな…。おまえ、こんなに弱かったか？」

男は挑発するように言い、銀時を見る。

「左目を潰した男にとどめを刺そうとした時、飛びかかって来たお

まえの方が」

「うるせエッ……！」

木刀を握り締め、再び男に飛びかかる。

男は刀で木刀を受け止める。

「つまらんな。あの白夜叉が、ここまで弱かったとは……」

木刀を弾いた時、男の持っていた刀が、不気味に赤黒く光った。

「刀が……！」

「てめエ、まさかその刀は……！」

「知っているのか？この『緋願花』を」

間髪入れずに、男は緋願花を振り下ろした。

「くっ……！！！」

銀時は咄嗟に避けるが、髪が少し切れた。

「てめーが、緋願花を持ってたのか……！！！」

「銀ちゃん、逃げるネ！」

「そうですよ！桂さんも言ってたでしょ！？辻斬りが緋願花を持っていたら逃げろって……！」

「……逃げんなら、おまえらだけで逃げろ」

2人の顔を見ずに、銀時は言った。
その声は冷たかった。

「何言ってるんですか!!」

「一緒に逃げるアル!」

新八と神楽は叫ぶが、銀時は聞かずに、男に向かって行く。

「銀さん!!」

「銀ちゃん!!」

再び銀時は、男と……いや、緋願花と打ち合う。

「銀さん……、何であそこまで……」

激しく打ち合う銀時の姿を見て、新八は呆然と呟く。
紙一重で銀時は緋願花を防ぐが、次第に押されて行った。

バキィッ

木刀が砕け、粉々に砕け散った。

「死ね」

低い声と共に、赤黒く光る刃が、銀時の首筋から脇腹を斜めに斬り裂いた。

「ぎっ…!!」

血が吹き出し、銀時はその場に倒れた。

（声が…出ない）

（足が…身体が動かない）

信じ難い状況に、新八と神楽は、その場を動くことが出来ない。

男はとどめを刺すかのように、銀時の首に向かって、緋願花を振り下ろした。

「や…、やめろオオオツ!!」

なすすべも無く、2人が叫んだ時、刀同士がぶつかる音が響いた。

「リーダー、新八くん、大丈夫か!？」

振り返ると、そこには桂がいた。

「桂さん!」

男の方に目をやると、刹那が刀で緋願花を防いでいた。

「バナラ…!!」

服装はいつもと違い、赤くやや丈の短い着物に、白い襟巻きで口元を隠し、髪を赤い紐でポニーテール状にした、煉獄姫の出で立ちだ。

「そこをどけ、小娘」

「断るわ」

「てめエの相手は、俺だ…！」

男の背後から、高杉が斬り掛かる。

「ふん…」

刹那を突き飛ばし、高杉と刀を交えた。

「あの時の奴か……」

「搜したぜエ、『黑夜叉』…！！」

憎悪と怒りのこもった声で、高杉は男を呼んだ。

「黒…夜叉…？」

新八は驚きながら呟く。

その間に刹那は、銀時の止血をし、桂の近くに行く。

「銀ちゃん…！」

「銀時！おい、しっかりしろ…！」

止血は出来たが、銀時は微動だにしない。

「無駄だ。そいつは、もう死んでいる。緋願花に喰われてな」

「てめエ……!!」

黒夜又は高杉の刀を押し返すと、その場から立ち去った。

「待て!!」

「高杉、今は銀時だ!」

「銀ちゃん、早く起きるネ!」

「しっかりして下さい!」

「大丈夫。まだ、息がある」

刹那は呼吸を確かめた。

が、虫の息に近く、危険な状態だった。

「すぐ万事屋に行くぞ!」

桂は銀時を背負い、全員万事屋に向けて走った。

第10話 困惑の夜（前書き）

2日連続投稿！
いつ以来だ？

第10話 困惑の夜

先に寝ていた白哉は、玄関の戸を叩く音に目を覚ました。

「ん…？銀時達か？」

眠そうにしながら起き上がると、神楽の声が聞こえた。

「びゃつくん！早く開けるネー！！」

「銀さんが大変なんです！！」

「は！？」

白哉は驚き、玄関に向かうと、戸を開けた。
そこには、血だらけの銀時を背負った桂と、新八と神楽、高杉と刹
那がいた。

「銀時…！？おい、何があっただよ！！」

「話は後だ。上がるぞ！」

桂達は急ぎ、銀時の手当てをし寝かせた。

「大丈夫なのか、銀時は！？」

不安感から白哉は、桂達に詰め寄った。

「……」

「おい、なんとか言えよ!!」

「銀時は…、緋願花に斬られた…!」

「な…に……」

白哉は目を見開き、寝かされている銀時を見る。

「大丈夫。銀時さんは、死んでないよ」

刹那は、口元を覆っていた襟巻きを下げ、いたわるように言った。

「傷がかなり深い。目を覚ますには、時間が掛かるだろう」

浅く呼吸する銀時を、桂は一瞥した。

「……あの、訊いてもいいですか?」

黙っていた新八は、思い切って訊いた。

「さっきの黒夜又って…、誰なんですか!？」

「そうアル!黒夜又だか影夜又だか知らないけど、銀ちゃん、あいつを殺そうとしてたネ!!」

「…神楽ちゃん。影夜又は、この小説書いてる人だから……」

「……奴のことを話すとなると、かなり長くなる」

腕を組み、桂は呟いた。

高杉と刹那も、険しい表情をしている。

「おまえらには、自分の過去とか話してねエんだろ？」

高杉が訊くと、新八と神楽は頷き、白哉も曖昧に頷く。

「白哉くんからだ、銀時さんと別れた後になるわね…」

「この話は、日が登ってから話す。今は休んだ方がいい」

桂が提案した。

確かに今の時間帯は遅く、話を聞いても、よく分からないかもしれない。

「そう…ですね。じゃあ明日、話して下さい」

桂達は帰って行き、3人は銀時を見た。

「何があつたアルか？銀ちゃん…」

「桂さん達共、関係してるみたいだし……」

「銀時は、俺と別れた後のことをろくに話さなかった。まるで、話したくないみたいに」

明日…いや、今日の朝に、銀時の過去に触れることに、3人は戸惑いと不安を覚えた。

第10話 困惑の夜（後書き）

内輪ネタは、これからも出すか…。

第11話 目覚め（前書き）

23歳になりました。

カイジを観て来たので、テンションが上がってます…!!

第11話 目覚め

次の朝、万事屋に泊まった新八は、いつもより早めに起きた。

「あ、新八起きたネ」

見ると、神樂が先に起きていた。

「神樂ちゃん！早いね」

「私より、びゃっくんの方が早かったアル」

白哉は朝食を作っているのか、台所から音が聞こえる。

「……じゃあ、僕が一番最後ってことか」

ぼやいた後、新八は銀時の様子を見える。
相変わらず呼吸は浅く、目を覚ます気配は無い。

「銀さん……」

「新八、飯出来たぞ」

後ろで白哉が声を掛け、同じように銀時を見つめた。

「早く起きろよ、銀時……！」

白哉が手に握り締めた時、玄関から声がした。

「おはようございます」

「！及川さんだ」

部屋の外から、神楽と刹那の話し声が聞こえた。

「早いアルナ、バニラ」

「新八さんと白哉くんは、あっちにいるの？」

「ウン」

「じゃあ、私も行くね」

髪を下ろし、橙色の着物を着た刹那が、和室に入ってくる。
桂達の姿が見えないところを見ると、1人で来たようだ。

「薬持って来たんだけど…。今使っていい？」

「あ…、いいですよ」

「その薬、おまえが作ったのか？」

「そうだよ。昨日帰って、すぐ作ったの」

刹那は、薬の入った瓶を取り出す。

「ところで、今朝ご飯なんでしょ？薬は私が塗っとくから、食べていいよ」

「え？でも…」

「いいから、銀時さんは私が看てる」

「じゃ、じゃあ、お言葉に甘えて。月原さん、食べましょう」

新八と白哉はリビングに行き、刹那は瓶を開けて、薬を塗り始める。

（首筋にかけての傷が、やっぱり深い……）

振り返り、新八達の様子を見る。

（見てない。今なら…）

刹那は銀時の傷に、両手を翳した。
すると、白い光が輝く。

（これで、『傷』は治る）

自身の持つ癒やしの力を見られたくない為、手早く行った。
ある程度治した時、銀時が呻き声に違い声を上げた。

「銀時さん…？」

「刹那、どうした!？」

すぐに白哉がやって来て、新八と神楽も近くに来る。

「今、銀時さんが…」

指を差すと、銀時はうつすらと目を開けた。

「銀ちゃん!!」

「気が付いたんですね!」

銀時は答えず、目線だけで辺りを見ると、刹那と目が合った。

「……め」

「え?」

「何か言ったアルか?」

かすれた声で、銀時は再び言う。

「久し…ぶりだな。煉獄…姫」

第11話 目覚め（後書き）

過去の話は、次の次位に書きます。

第12話 現れた者

「え……。銀さん、何言ってるんですか？」

「そうネ。いつもバニラのこと名前で呼んでるのに……」

新八と神楽は困惑し、刹那は僅かに目を見開く。

「大丈夫か？刹那のこと分かってるか？」

白哉が訊くと、銀時は新八と神楽、白哉の顔を順に見ると、呟くように言った。

「誰……。？おまえら」

「……え？」

沈黙が流れ、3人は銀時の顔をじつと見る。

「誰って、何言ってるんだよ」

「私達のこと……分からないアルか？」

「……分からないじゃねエよ。俺は、おまえらのことは知らねエ」

動揺する白哉達に銀時ははっきりと言い、刹那を除く3人は、その言葉に衝撃を受けた。

「あなた…やっぱり」

ぽつりと刹那は呟く。

その声は低く、煉獄姫としての口調だった。

「やっぱりって、何ですか？」

「どういうことだ、刹那！」

白哉と新八は詰め寄るが、刹那は答えない。

「悪イが、もう少し寝かせてくれ。まだ、身体が…」

言葉の途中で銀時は目を閉じ、再び眠った。

「また寝ちゃったアル…」

「及川さん、何か知ってるんでしょう！？教えて下さい！」

「…これは、私1人だと説明出来ないわ」

息をつき、刹那は頭に手をやった。

すると、玄関の戸を開ける音が聞こえた。

「桂さんと高杉さんかな」

「ちょっと、話してくるね」

そう言って刹那は立ち上がると、玄関に向かった。

「バナナ達、何話してるアルか？」

廊下から話し声があるが、小声の為よく聞こえない。
しばらくすると、刹那は桂、高杉と一緒に戻ってくる。

「昨日言ってたこと、これから話すね」

「とりあえず、こっちに集まってくれ」

桂達は3人をリビングに集め、静かに和室の襖を閉めた。

「刹那から話は聞いた。…話すことが多くなってしまったな」

「それも、ちと厄介なことだ…」

煙管を加え、高杉がぼやく。

どうやら、この3人も困惑しているようだ。

「どこから話そうか……」

「全部だ」

考える刹那に、白哉はすぐに言った。
新八と神楽も頷いた。

「知ってること、全部話してくれ」

「…分かった。全部話すね」

「あと…。銀ちゃん、今どうなってるアルか？」

「僕達のことを知らないって言ってたし、まさか…記憶が消えて」

「それは無いよ」

刹那は、新八の言葉を遮った。

「知らないって言ったのは、言葉通りの意味。あの人は、あなた達のことが分からないんじゃないかって、知らないの」

「え…？」

「よく分かんないネ」

「『あの人』って、何で他人みたいに言ってたんだ？」

銀時の名を言わず、『あの人』と言った刹那に、白哉は疑問を持つ。

「あの人は……銀時さんじゃない」

「え！？」

「銀時じゃないって…じゃあ、誰だよ！？」

「あれは……」

「白夜叉だ」

刹那に代わって、高杉が言う。

「白夜又って、戦争の時の銀さんの異名ですよね…」

「何でその名前が出てくるんだよ」

その名前が何故出てくるのか、全く分からなかった。

「戦争の時、ある出来事があったの。その際に…」

「あいつが、二重人格だと分かった」

「二重人格!？」

高杉の発言に、3人は驚く。

そんな3人を見ながら、桂が続けた。

「最初から二重人格だった訳ではない。原因は、あの戦。そして、戦に参加するきっかけになったのは、『あの日』だ」

第12話 現れた者（後書き）

次回から、ヅラ達が語る過去です。

すべて捏造、やや無理な描写があると思いますが……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3031y/>

リライト ～紅く染まった花～

2011年11月24日13時57分発行